

SONRISA

そんりさ

Vol.136

1995年11月 古谷桂信撮影



ボリビア先住民政治と道路建設

- | | | |
|----|-----------------------|-------------|
| 02 | ボリビア先住民政治と道路建設問題 | ……岡田 勇 |
| 06 | ボリビアだより「アラシータスのお祭り」 | ……藤田 護 |
| 08 | ハイチ地震2年 支援はどこへ | ……新川志保子 |
| 12 | ナルコ回廊に行く 1 | ……山本昭代 |
| 16 | グアテマラ・ジェノサイド裁判 | ……石川智子 |
| 16 | ケチュア語詩集「アイランプ」より 2 | ……栗原茂太 |
| 18 | ラ米百景「キューバ・ブリエト文化相交代」 | ……伊高浩昭 |
| 20 | 音楽三昧♪ペルー「在りし日のアンデス音楽」 | ……水口良樹 |
| 22 | メキシコ食巡り「Kibiオープン焼き」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 23 | ニュースクリップ | ……サザエ |

【ボリビア先住民政治と

TIPNIS道路建設問題】

岡田 勇

2006年に初の先住民大統領誕生として国際的にも注目を浴びたモラレス大統領だが、2011年のTIPNIS道路建設問題は、この理想的な象徴が幻であり、実際には多様な勢力の権力闘争の一部に過ぎないことを明らかにした。「変化の過程(proceso de cambio)」を追求するモラレス政権は、政権獲得から5年を過ぎ、2009年国政選挙ではモラレスが約64%の得票率で再選されただけでなく、上下両院で与党が3分の2の絶対多数議席を確保したため、具体的な成果を生む開発の実行が「待った無し」となっている。しかし、統合的な理念や開発戦略が不明確なまま、少数派先住民の権利をないがしろにする開発に国内世論の抗議が沸き起こったのは当然であると言えるだろう。

小稿は、ボリビアの多様性をはらんだ先住民諸勢力の構図が歴史的なものであり、モラレス政権は複数の先住民勢力とそれぞれ異なった関係性を築いていることを簡潔に見た上で、現時点までのTIPNIS問題の進捗を辿る。

1. ボリビア先住民の多様性と基本構図

有史以来、ボリビア先住民³は、複雑な勢力構図を有してきた。現在のラパス・オルロ・ポトシが位置するアンデス高地には多くのアイマラ先住民族が住み、チチカカ湖周辺に独立心旺盛な諸王国が存在した。コチャバンバやチュキサカが位置するアンデス東斜面の渓谷部は、スペイン植民地の要であったポトシ銀山に農産物を供給する荘園地帯として栄え、ケチュア語を話す先住民農業労働者を多く抱えた。他方でパラグアイ等の大チャコ地方に広く居住するグアラニー先住民族は、サンタクルスやタリハが位置するボリビア東部低地に多く居住する。さらにベニ・パンドのアマゾン熱帯雨林地帯には多様な先住民言語を話す少数民族が居住しており、この地方は特に首都ラパスや他の植民地都市と隔絶してきた。その他、オルロ県ポーポ湖のウル族のような少数民族は各地に点在し、アンデス山脈とアマゾン熱帯雨林といった天然の障害が長い間交流を妨げてきた。

植民地時代・独立以後も、ある程度の人口移動はあったものの、このようなアイマラ・ケチュア・グアラニー・少数民族の多様性に富んだ分布は基本的に維持された。多くのアイマラ・ケチュアは共同体ベースの農民労働者として、

あるいは一部はポトシ等の鉱山で「ミタヨ」と呼ばれる強制労働システムに調達された鉱山労働者として、後に組合運動に組織され、20世紀を通じて重要な政治勢力となった。コチャバンバではコカ葉が収益率の高い農産物として多くのアイマラ・ケチュア移民を集め、1980年代以降にコカ栽培撲滅政策を掲げる政府と激しい闘争を繰り広げた。また、多数のアンデス先住民は、農村で過剰となった人口圧力から、あるいは時の政府に後援されて、大都市の郊外や東部低地に移住し、自立・防衛のための住民組織を形成した。1990年代になると、エルアルト市など大都市の郊外には数万人規模の農村出身者が居住するようになった。また低地サンタクルス県民の約半数は、アンデス高地からの移住者によって構成されるようになった(しばしば開拓農民(colonizadores)と呼ばれる)。

端的に言ってボリビアの先住民分布と政治の基本構図は、アルティプラノや渓谷部に居住する圧倒的多数のアイマラ・ケチュアと少数民族のその他先住民族に分けられ、それぞれ異なる組織を形成する上、以下で見られるようにモラレス政権とも異なった関係を築くようになった。宮地(2007)等が確認したように、ボリビア先

住民の政治行動は、多数派先住民と少数派先住民の異なる利益と対立として理解すべきなものである³¹⁾。

2. モラレス政権下での政治模様

2006年に成立したエボ・モラレス政権は、多様な先住民勢力を包含したものであったが、時が経つにつれて、多数派支配を色濃くするようになった。政権と主要な先住民勢力との関係は、以下5例のように様々である。①コチャバンバ県チャパレ地方の「コカ栽培農民6連合」は、その最高リーダーであるモラレス大統領と直結した支持関係にある。②アンデス高地のアイマラ・ケチュア農民を多数束ねる「ボリビア農民労働者組合連合(CSUTCB)」とその女性組織、そして開拓農民による組織は、一部のリーダーシップ争いはあるものの、盲信的なモラレス支持を維持した³²⁾。③1980年代に設立した東部低地及びアマゾン熱帯雨林の少数先住民を束ねる「ボリビア東部先住民連合(CIDOB)」は、当初よりモラレス政権と距離をとり、やがて利益対立を鮮明とするようになった。④NGOや知識人に後押しされ、アンデス高地と溪谷部のいくつかの共同体を基盤として成立した「コリヤス・ユ・アイユ・マルカ全

国会議(CONAMAQ)」は、植民地化以前への回帰という意味での「先住民復権」を唱えるが、現実との乖離が強く、アイマラ・ケチュアの多数に支持を広げず、CIDOBと近く、モラレス政権と距離を置く立場を維持した。⑤参考までに先住民組織ではないが、20世紀を通じた最大の労働組合組織であった「ボリビア中央総連(COB)」やエルアルトの住民組織は、時と場合によって支持・反対を左右した³³⁾。

このようなモラレス政権と先住民組織の多様な関係性は、3点で理解できる。第一に、選挙での票田として、政府は多数を包含する先住民組織に利する一方で、少数先住民組織をしばしば無視する。第二に、コカ栽培農民のように大統領との直結した関係から、またはエルアルトの住民組織のように首都ラパスに対する戦略的要衝に位置するために、政府に対する拒否権プレイヤー(単独で絶対的な拒否を突きつける存在)となりうる組織もある³⁴⁾。第三に、幾つかの先住民組織のリーダーは、上下院議員として政権入りし、リーダー自身の立ち回りによって特定の政策に影響を与えうる。ラパス県アチャカチ地方のボスであるE.ロハス(現在与党MAS党の党上院幹事長)やCSUTCBのトップであったI.アバロス等がそうである。

TIPNIS道路建設問題は、こうした先住民組

織間の勢力争いが顕著に現れた事例であり、先住民モラレス大統領がいかに政治権力のルールに基づいて動き、それに対して少数先住民がどう立ち向かうかという構図を示すものである。

3. TIPNIS道路建設問題³⁵⁾

イシボロ・セクレ国立公園・先住民居住区(TIPNIS)は、コチャバンバ県とベニ県にまたがるイシボロ河等の流域に位置し、1965年に国立公園に、1990年の低地先住民の行進以後に先住民居住区に、その後1996年の農地改革法の下で原初共同体地(TCO)に認定された。TIPNISには、モヘーニョ、ユラカレ、チマネ先住民族の64共同体、約6000人が居住しており、多様な自然環境を有する地域として知られる。

経済開発と地理的な国家統合のために、アマゾン熱帯地方を挟んで分断された北部のベニ県との交通網を整備する必要性は1980年代から認識されており、2000年代にコチャバンバ県のビジャ・トゥナリとベニ県のサンイグナシオ・デ・モホスを結ぶ幹線道路建設が計画され、2008年8月1日、ボリビア道路公団はブラジル建設企業OASと道路建設を契約

した。OASは、TIPNISに重なる区間とその前後2区間の全3区間に工事区間を分け、保護区監督局(SERNAP)が全3区間を統合的に検討すべきと勧告したにもかかわらず、3区間別の環境ライセンス取得を申請した。環境ライセンスの発行についてはボリビア政府内で意見の衝突が起き、環境省幹部の抗議辞任の後で、TIPNISと重なる第2区間を除く第1、3区間に対して環境ライセンスが発行された。他方で、2011年1月20日、ボリビア政府は右道路建設のためにブラジル開発銀行(BNDES)と3.32億ドルの融資契約を締結し、6月3日に第1、3区間の道路建設が開始された。

TIPNISの先住民はそれぞれの部族組織を通じてCIDOBに加盟しており、自然環境と居住環境への悪影響を理由として当初から道路建設に反対していた。他方で、コチャバンバ県チャパレ地方からTIPNIS内に侵入してきたコカ栽培農民は、道路建設による耕地面積の拡大を要求した。さらに、TIPNIS内には炭化水素資源や林業資源が存在し、企業や開拓農民が注目していた。以上に対して政府は、経済開発のためのインフラ整備を進めるだけでなく、コカ栽培農民組織のトップでもあるモラレス大統領を中心に、道路建設に強い積極性を見せた。2011年6月の時点で、モラレス大統領は

「是が非でも(sino sí)」道路を建設すると宣言した。

2011年6、7月、CIDOBはTIPNIS先住民組織を含む全国集会を開催し、ベニ県の県都トリニダーから首都ラパスに向けて道路建設反対の抗議行進を行うことを決定し、8月15日に156人でトリニダーを出発した。直後から、道路建設の所管大臣であるデルガディージョ公共事業大臣やチョケワンカ外相等が行進の滞在地を訪れて対話を試みたが、行進参加者は大統領との直接対話のみを求め、交渉は実現しなかった。

8月30日、行進がベニ、ラパス両県の県境にあるユクモに近づくと、コカ農民を中心とする開拓農民たちは先住民のラパス県への侵入を阻止すべく、道路封鎖を開始した。9月8日、政府は暴力的衝突を回避する目的で約400名の警察を派遣した。9月24日に再度の対話を試みるべくチョケワンカ外相がユクモを訪れると、行進参加者は外相を行進の先頭に連れて行き、開拓農民の道路封鎖に向けて「盾」として共に歩くことを強要した。外相はその後2時間半で解放されたが、この後で政府側は強硬姿勢になった。翌25日午後、警察は休憩中の行進参加者を包囲・捕縛し、強制的にバスに乗せてトリニダー等に強制送還を試みた。ラパ

ス・ベニ県の地域住民は空港占拠などにより警察の強制送還を阻止した。右事態は、警察が無防備な先住民の行進に介入した事態として、国内外世論から非難された。

警察介入事件は、政府内にも亀裂を生んだ。チャコン国防大臣が抗議辞任したほか、ジョレンティ内務大臣、フアルファン内務省次官が引責辞任した。全国で政府に対する抗議ストが発生し、大統領も事態を遺憾と発言せざるをえなくなった。行進は10月1日に少し離れたキキベイから再開され、数度の対話提案を拒否し続けた後で、10月19日ラパスに到着した。

10月20日の大統領府前での警察との小競り合いの後、先住民は大統領府前の中央広場を占拠し、21日から大統領との直接交渉に入った。24日、大統領は先住民側の要求を受け入れ、TIPNISの「不可侵性」を規定した法第180号を公布した。

しかしTIPNIS道路建設問題は、先住民の圧勝では終わらなかった。TIPNIS南部に入植していたコカ農民たちは、TIPNIS南部先住民会議(Conisur)という組織を形成していたが、12月9日にコチャバンバで道路建設の決行を求める集会を広き、19日にはベニ県イヌタから首都ラパスに向けてTIPNISの「不可侵性」を定めた法第180号の撤回、そして道路

建設の断行を要求する行進を開始した。
Conisur の行進は、4 日間歩き続け、警察等との衝突を経験することなく、アンドン高地の親政府派の農民組織の支持を受けながら、1 月 30 日にラパスに到着した。^{iv}
政府は TIPNIS の「不可侵性」を謳った法第 180 号を撤廃することは困難と判断し、TIPNIS の「不可侵性」の是非を問う協議実施を規定した法律を 2 月 10 日に公布した。
TIPNIS 先住民と CIDOB の行進にとっては、自らが勝ち得た「不可侵性」を、もう一つの行進によって再び議論の俎上に戻されることになった(2012 年 2 月末現在)。

△参考文献▽

藤田護(2012)「ボリビア便り(09)―2011年のボリビアの政治と経済を振り返る」『そんりき』(2011年2月号)
宮地隆廣(2007)「統一協定(Pacto de Unidad)―ボリビア先住民運動の新展開と変わらない構造」『ラテンアメリカ時報』(2007年秋号)
Defensoría del Pueblo[2011] *Informe Defensorial respecto a la violación de los derechos humanos en la marcha indígena. noviembre Fundación Tierra*[2012] *Marcha indígena por el*

TIPNIS. La Paz: Fundación Tierra.
Fundación UNIR[2011a] *Análisis de la conflictividad del TIPNIS y potenciales de paz. La Paz: Fundación UNIR.*
Fundación UNIR[2011b] “El TIPNIS desde la perspectiva de la conflictividad.” *Puertas abiertas, año 7, edición especial.*
Mayorga, Fernando[2010] *Dilemas. Cochabamba: CESU-UMSS.*

—
i 著者プロフィール：在ボリビア日本大使館専門調査員。ただし本項は、筆者の個人的見解によるものであり、在ボリビア日本大使館及び外務省の見解とは何ら関係ない。

ii 本稿では、「先住民」を植民地化前から南米大陸に居住していた不特定の人々とその子孫を指すものとして、「先住民族」を一般的に呼称される特定の語族集団を指すものとして用いる。これらの語法は、何らかの蔑視や事実上の差異を示唆することを意図するものではなく、他方で何らかの国際法上の権利を認識するものでもない。

iii もちろん、この二項対立は、例えばポトシ・オルロ県境の Quillaca(ポトシ)と Coroma(オルロ)という2つのアイマラ共同体が100年以上も繰り返してきた土地争いのような、地方の無数の利益対立を無視するものではない。

iv カルデナス元副大統領は、2011年9月に開

—
催された討論会で筆者の質問に答えて、2011年秋の TIPNIS 問題をめぐる意見対立が CSUTCB の中で起きたとき、モラレス政府の政策に対して異議を申し立てるリーダーは排除されたと述べた。

v 政府と社会組織の関係について、Mayorga (2011) を是非参照されたい。2010年12月から2011年にかけて、政府の不人気政策に反対する抗議行動が再び高まりを見せるようになった(藤田2012)。

vi モラレス政権が国营企業や公共事業をエルアルトやチャパレに優遇設置する政策をとってきたことは特筆に値する。

vii 本項の記述は、特に断りの無い限り La Razón, Página Siete, El Diario, El Cambio, El Deber といった主要紙の報道、Fundación Tierra(2012), Fundación UNIR(2011a), (2011b), Defensoría del Pueblo(2011)といった報告書に基づく。

viii X.アルボは、Conisur はコチャバンバ県政府がベニ県に対して県境を有利に定める意図で設立を支援した組織であり、ほとんどは入植コカ農民であって、一部のみ先住民居住区に居住すると説明する(2012年2月19日付パヒナ・シエテ紙の論説)。

ix 2012年1月17日報道によれば、Conisur の行進参加者の一部は、300ボリビアーノスの日当が政府から支払われないため、行進から離脱した。

ボリビア便り(その一〇) —アラシータスのお祭りの もう一つの顔—

二〇一二年三月十五日

藤田 護

ボリビアのラパスでは、一月の終わりになると、カルナバルを前にそろそろアラシータス (alasitas) のお祭りだという気分が高まり始めます。この祭りの名前は、アイマラ語の *alasiña* (自分のためにくを買う) という動詞から来ていて(ただし異説もあります)、様々なもののミニチュアの市なのです。例えば、トラックを一台持ちたいと願う人はミニチュアのトラックを、店を持ちたいと願う人はミニチュアの店とミニチュアの商品セットを、今年こそ学位を取るぞという人は国立サンアンドレス大学 (UNSA) の学位セットを、そして単にお金が欲しいという人のためにはミニチュアのドル札とポリビアーノス札など。学位セットは年々充実していて、最近では「完全専門家セット (profesional completo)」と呼ばれる、学士学位記、論文合格証明書、成績優秀者証明書、修士学位記(！)、そして雇用契約(！)までがセットになったミニチュアフォルダーが売られるようになり

ました。これらを買って、初日(一月二十四日)の正午辺りの時間に、ずらっと並ぶ呪術師の人たちにお祓い (ch'alla) をしてもらおうと願いが叶うということで、初日のお昼はもう押すな押すなの人ばかりです。

このアラシータスのお祭りを象徴するのは、エケコ人形という、髭の生えたおじさんが沢山の物を背負っている像で、これは南部アンデス高原部の豊穡の神だとされているのです。しかし、なぜか日本では婚活に効果があると報道されたようで、少し異なった形でしかし日本からの注文が大きく増えているようです。これが効果を持つには煙草を吸わせることが重要で、私の友人は毎週金曜日のお昼に律儀にエケコ人形に煙草を吸わせていますが、厳密には週に二日吸わせないといけないという話も聞いたことがあります。

しかし今回の本題はそのエケコ人形ではありません。アラシータスのお祭りが始まると、街中の新聞の売店でいつも売られている新聞のミニチュア版(写真1)が売られるのです。この日刊新聞のミニチュア版が面白いのは、それが政治風刺の祭典のようになっていてからで、そこまで話題になっていた政治的・社会的現象を面白おかしく嘘の記事に仕立て

上げます。ちよつとエイプリル・フールに近いところがありますが、騙そうとするよりはいかに面白く遊ぶかに重点が置かれていて、しかもそこからボリビアの政治や社会の諸相が垣間見えてくるように思っています。今回は、ちよつとその記事を幾つか開いてみましょう。

今回面白かったのは、現在ボリビアで二番目の発行部数となった『パヒナ・シエテ (Página Siete)』紙の、TIPNISの問題を前面に押し出しています。前号でも取り上げましたが、これはイシボロ・セクレ先住民領域国立公園を突っ切る道路を政府が承認し、ここに居住する低地先住民が反対するデモ行進を展開したため、二〇一一年後半に大きな話題となりました。

最初の記事は、二〇一一年九月二五日のベニ県ヤクモ市(記事ではユク・オノとなっております)で警察がデモ隊に強制介入した件です。この介入への反発から、一気に低地先住民を支持する世論が高まっていったのですが、この記事では、警察が暴力をふるったという報告書のほかに、もう一つの調査報告書が存在していることになっていて、そこではタマリンドの木の下で昼寝を楽しんでいる四五〇人の「勇敢な」警察に対して三〇人の「臆病な」先住民が暴力をふるったことにな

っていて、これは警察のあほな無能さを揶揄しています。これに対し、先住民側は、警察が自分たちの夫のように、しかも彼らが最悪の酔っ払い状態でもしなかった暴虐を振るってきたと証言していることになっていて、暗に警察の暴力を男性優位（マチスタ）社会において女性が受けている暴力と重ね合わせながら批判します。そして、この件での最悪の被害として、一人の先住民が頭部に重傷を負ってしまった結果、彼はエボ・モラレス政権の閣僚入りに関心を示すようになってしまったとされていて、これは抽象的な政権批判であるだけでなく、このTIPNISの件で閣僚の辞任と交代が相次ぎ、後任閣僚の選定が難航した経緯を揶揄しているのです。

その次の記事は、エボ・モラレス大統領が三人目の子どもが出来てしまったことを知って、女性団体からの批判とジャーナリストの追及にさらされ、またマチスタな軍隊から称えられる中で、軍隊に入隊してしまい父親としての責任から逃げ出してしまったことになっています。エボ・モラレスは、実際に結婚しておらず、異なる女性との間に子どもが二人いるとされていますが、正式に自分が父親であることを認めていないようで、女性団体から度重なる批判を受けてきました。

有名なのはムヘーレス・クレアンド（Mujeres Creando）という団体の、「エボは父親になることを知らないから、母親になるということがどういうことかも分からない（Porque Evo no sabe ser padre tampoco entiendo lo que es ser madre）」という、ラパス市内数か所に展開された落書きです。大統領は、エケコの姿に変装をして未明に大統領官邸を秘密裏に抜け出したということになっていて、その直前に、徴兵制を二年に延長し、望まれない出産が発覚した場合は無期限に延長できるという大統領令に署名していったということになっています。その相手の女性は、TIPNISのどこかに居住しているとされ、大統領を擁護する側は、チャパレのコカ栽培者に低地先住民の領域を征服するように呼びかけた言葉を、大統領自身が忠実に守ったと評価しています。（このTIPNISの紛争は、低地への進出を続け低地先住民を押し出しつつあるコカ栽培農民の利害を代弁している現モラレス政権に対する、低地先住民の抵抗という性格をもっています。）相手の女性は、コカ栽培者からのコチャバンバ県熱帯チャパレ地方（ラパス県ユンガス地方と並ぶコカ栽培の一つの中心地で、エボ・モラレスはこのコカ生産者連合の代表を続けています）における豪邸の提供の申し出を断って、TIPNISに住み続

ける意思を表明しています。これは、父親としての責任を果たさない男性優位社会への批判と、TIPNISが受けた被害と抵抗を、アクロバティックに組み合わせたストーリー展開と言えます。

小さな小さな新聞ですが、実はこのように読んでみると記事に様々な工夫が凝らされていたりして、ボリビアの社会を理解していくための一つの入り口になるように思います

（おわり）



▲写真1：普通の新聞（左）とミニチュアの新聞（右）

ハイチ地震より二年

支援はどれくらい？

新川志保子

二〇一〇年一月一二日、ハイチは大地震に襲われ、31万人以上（人口は約1千万人）もの死者、150万人以上が家を失うという未曾有の被害を出した。国際社会が支援に乗りだし、多くの政府や国際機関、NGOがハイチに向かった。その大地震から二年、ハイチの状態はどうなっているのか、そして災害支援、復興支援はどうなっているのだろうか。

国連の推定によると、地震の後国際社会から緊急支援で16億ドル以上、復興支援に20億ドル以上が寄せられたという。だが、2年経った今も未だに50万人以上の人々が避難キャンプで仮設テント暮らしを強いられている。瓦礫も片付いていない所がいたるところに残っている。巨額の支援金は何にどのように使われたのだろうか。

緊急支援

まず、最も多額の支援を行なった米国。最初の拠出金3億8千万ドルのうち、33%は米兵派遣費用として米国に払い戻され、42%はセーブ・ザ・チルドレンや国連世界食料計画、米州保健機構などNGOや国際機関に渡されたが、ハイチ政府に提供されたものはほとんどない。その後さらに拠出され、米国による緊急支援金は16億ドルにのぼるが、これも同様だ。6億5千万ドルは米国防省に払い戻され、2億2千万ドルはハイチ人被災者を受け入れた各州の施設に、3億5千万ドルは米国際開発局USAIDに災害支援費として、1500万ドルはホームランドセキュリティ（移民局）にハイチ人受け入れの手続き代として支払われた、というように使われていた。

ちなみに、米国以外の国際社会からの寄付も同様に使われている。集まった人道支援の24億ドルは34%がそれぞれの拠出国の軍や民間機関に払い戻され、28%は国連による活動経費に、26%がゼネコンやNGOに、5%が赤十字に、そしてハイチ政府に渡されたのは1%、ハイチのNGOには0.25%しかない。つまり、支援のうち、直接ハイチに届いたものはごくわずか、ということになる。

地震直後から国際機関だけでなく大小様々なNGOがハイチに入った。だが、それぞればらばらに活動を展開し、住民組織との調整がなかったために必要なものが不要としている人に届けられていないという批判が当初からあった。米赤十字はおそらく最も寄付を集めたNGOで、4億8千万ドルをハイチ支援のために受け取った。だが、実際に使われたのはこのうち3分の2だけだという。しかも詳しい会計報告は出ていない。オックスファムのように会計報告をきっちり行い、ハイチの活動ではスタッフの90%をハイチ人にする、というようなところもある一方、募金は行なってもその後何の報告も行わず、クレオール仏語も話さないスタッフを派遣し、結局何をやっているのかわからないNGOも多かった。

米国の対応―人道援助より「安全」

米国からの支援のうち八億ドルほどが米国防省に払い戻されたことになるが、米軍の派遣は本来に必要なものだろうか。地震の二日後にプレヴァル・ハイチ大統領、米国大使、欧州連合大使、ブラジル大使らが集まり対応を協議した。ウィキリークスにより公開された駐ハイチ米国大使による本国への打電では、

その席で、プレヴァル大統領は緊急に必要とされているのは「電話線の復旧、瓦礫の片付け、食料と水を人々に届ける、遺体を埋める、怪我人の治療」だと声明し、治安については何らの言及もなく、また軍の派遣も要請しなかった。しかも、米国大使からは数度にわたり、地震後の治安は全体として落ち着いており、暴力や強奪は突発的にしか起こっていないという連絡や、地震から8日たち、被災者は空き地で避難生活を始めているが、まだどのような人道援助も受け取っていないにもかかわらず、皆落ち着いてよく組織され、市民的に振舞っている、という連絡が本国あてに送られている。地震直後治安の問題はなく、被災者は落ち着いて助け合っていたという米大使館の報告は、多くのジャーナリストの報道やNGOスタッフの証言とも一致する。にもかかわらず、米国政府は「深刻な食料不足が予想され、被災地では略奪が懸念される」と発表していた。

ハイチにはすでに国際連合ハイチ安定化ミッション(MINUSTAH 以下国連軍)が駐留しており、国連はこれを増強することで事態に十分対応することができるとしていた。しかし、米国政府はハイチ政府からの要請がなかったにもかかわらず、軍を派遣し、空港を制御し、被災者支援より「治安維持」を重視し続けた(最大時には2万2

千人もの米兵が動員された)のだった。

コレラ

未曾有の災害の後を苦しむハイチの人々にさらに追い打ちをかけたのが、2010年10月に発生したコレラだった。アルティボニート県でコレラが突如発生し、たちまち蔓延した。とりわけ、人口が密集し、飲料水が不足して衛生状態が悪い地域で感染が広がった。アルティボニート県では、地震の後住居を失った被災者が18万人以上も親類縁者を頼ってやってきていた。そのため、もともと劣悪な衛生環境がさらに悪くなっていたということもコレラ汚染が急に拡大することの原因だった。本来コレラは清潔な飲み水が確保できれば恐ろしい病気ではない。だが、ハイチでは飲料水を確保することができない人々が多いいのだ。2008年の調査では、ハイチの人口で63%が安全な飲み水にアクセスがなく、水洗トイレや貯水タンクなどの設備を持つのは17%に過ぎない。また、ずっとコレラの発症がなかったために病院やクリニックでもコレラ治療の知識がなかったこともさらに事態を悪化させた。2011年末で、コレラにより死亡したのは7千人以上のほり、感染者は52万人を超える。

ハイチでは100年以上もコレラ患者が出たことがなかった。感染者のコレラ菌を調べたところ南アジア型で、その地域の人間が持ち込んだと推定された。おりしも、コレラ発生は国連軍ネパール部隊の駐屯地がこの地域の川上に設置されてから数日後のことであった。トイレの汚物処理がずさんで、汚物が川に流れ出ている状態だった。そして下流に住む人々はこの川から水を汲んでいる。アルジャジーラ放送の特派員は、ネパール軍キャンプに近づき、トイレが川岸すぐ近くに設置され、排水設備もなかったことを報告している。国連は当初この事実を否定し、感染を食い止めるための努力を怠った。

そもそも軍事紛争が起こっているわけでもないハイチで駐留を続けている国連軍の存在そのものも問題だ。国連軍によるレイプなどの人権侵害も数多く報告されている。最近もウルグアイ軍兵士による若者のレイプを携帯ビデオに撮影されたものがインターネットにでまわり、問題になったばかりだ。国連軍がいなければコレラは発生せず、7千もの人命が奪われることもなかったのだ。

復興支援

国際社会からの地震復興支援は、53億ドルが約束された。が、その支援金はハイチ政府に渡さず、二つの機関を設置して、それが復興プロジェクトを実施すると決められた。ひとつは暫定ハイチ復興委員会（IHRC）でビル・クリントンとハイチ首相ベルリブが共同で責任者となり、もう一つはハイチ再建基金（HRF）だ。だが国際社会が約束した支援は実際には10%しか集まっていない。2011年7月の時点で、IHRCは32億ドル相当のプロジェクトを決定したが、そのうち実施されたものはわずかに5件のみ、8千4百万ドル分しかない。しかもIHRCはすでにその任期が切れて解散、残っている資金は宙に浮いたままとなっている。

USAIDは「地元のNGOに仕事を渡し」「地元ビジネスと直接契約を結ぶ」ことで「現地強化を行う」ことを目標に掲げている。だがその実態は逆で、2011年11月時点での復興支援事業予算約3億ドルのうち、83%がワシントンと太いパイプのある大手ゼネコンに渡され、ハイチ企業に行ったのはわずか0.2%にすぎない。しかも会計報告が義務付けられているにもかかわらず、大手ゼネコンが請け負った事業はきちんとした会計報告がされておらず、何にいくら使われたかを確認するのは困難だ。2011年秋におこなわれたUSAIDの監査では、二つの大手

ゼネコンが請け負った瓦礫を片付ける雇用創出プログラムで、予算の70%が機材と資材の購入に当てられ、2万5千人のハイチ人を雇うはずだったのが実際には8千人しか雇われていなかったことが明らかになった。しかも瓦礫は道路など公共性のあるものが対象になっっているにもかかわらず、彼らがやらされていたのは個人邸宅敷地内の瓦礫を片付けるというものだった。監査では、他にも大型プロジェクトでUSAIDの監督がまったく行われていないことなども指摘されている。

こういうプロジェクト実施をハイチ政府に任せないということの理由としてよく言われるのが汚職の問題だ。だが、米国に任せても汚職や癒着の問題があることは見てのとおりだ。

住宅事情

地震により、150万人以上の人々が住居を失い、仮設テント生活をおくらなければならなかったが、まだ59万人以上の人々が900のキャンプに住んでいる。Film at 11が作成したドキュメンタリー「ハイチ・お金はどこに行ったのか」には、被災から10ヶ月後と20ヵ月後の避難キャンプの状況を比べ、あとの方が悪くなっている様子が描かれている、約8千人が住むあるキャンプにトイレは

4つのみ、しかもトイレを設置したNGOは撤退、メンテナンスも行われていない。

これらのキャンプのほとんどは私有地であり、ハイチ政府が使用料を払っている。マリテリーが大統領に就任してから強制立ち退きが加速した。これらの立ち退きは執行令状もとらずに強行するという違法な措置で、しかもそれに警察や国連軍などが協力している。ハイチ政府は六つのキャンプを閉め、そこにいる人々を一六の地域に再定住させるというプログラムを開始した。1年分の家賃として500ドルが支給されるといふものだ。だが、その対象となっっているのは3万人にすぎないし、宣伝がほとんどされていないために、このプログラムの存在自体を知っている人が少ない。しかも500ドルの支給を受けるためにはまず自分で住む場所を見つけなければならず、子どもを抱えたシングルマザーなどは家を探しに行くことすらできない。これら六つのキャンプに住む住民へのアンケートによれば、3分の2は無職で、仕事があると答えた人のうちフルタイムは9%のみだ。住宅問題の解決には遠く及ばない。

復興から締め出されるハイチ

このように、世界中から数十億ドルという巨額の支援金が動いたにもかかわらず、決定の過程からハイチ政府とハイチ市民が排除され、恩恵を受けたのはハイチ人でもハイチNGOでもハイチ政府でもなかった（もつとも、ハイチ経済エリート層は例外だ。人口の3%の彼らはホテル経営、ガス・石油産業などでハイチの経済を支配している。地震の後は国際機関やNGOに土地や建物を貸して大儲けした）という構図が浮き彫りになるのである。そしてその代償を払わされているのが地震で苦しみ、コレラで苦しみ、劣悪な住環境に置かれ続けているハイチの人々なのだ。

参考資料

“Where the Relief Money Did and Did Not Go—Haiti After theQuake”

<http://www.counterpunch.org/2012/01/03/haiti-after-the-quake/>

“Wikileaks Haiti: The Earthquake Cables”, The Nation <http://www.thenation.com/article/161459/wikileaks-haiti-earthquake-cables>

Haiti: Where the Money go?, Film at 11

“Not Doing Enough: Unnecessary Sickness and Death from Cholera in Haiti”, Centre for Economic and Policy Research, August 2011

“Responding to Cholera in Post-Earthquake Haiti”, The New

England Journal of Medicine, December, 9 2010

“Update: Cholera in Haiti”, Partners in Health, January 2012

“Elimination of Cholera transmission in Haiti and the Dominican Republic”, The Lancet, January 11, 2012/03/22

他に、米国議会での連続公聴会（2012年1月24日、25日）Democracy Now! オンライン放送（Centre for Economic and Policy Research とHaiti Advocacy Working Group のプレスリリースも参考にした）。

ナルコ回廊に行く (第一回)

—メキシコ北部国境地帯を訪ねて

山本昭代

2011年8月、メキシコ北部を初めて旅した。最近興味を持ち始めたメキシコの麻薬密輸カルテルの話を読むにつけ、そのおもな舞台となる北部地域を見てみなくては、と思い立ったのだ。今回は、国境の街ティファナからシナロア州の州都、クリアカンを訪れ、そしてシナロア州の港湾都市ロスモチスからチワワ鉄道に乗った。カルテル間の激しい抗争や若い女性の連続殺人などで悪名高いシウダー・フアレスも、怖いもの見たさで訪れたかったが、時間的にきびしいので次の楽しみに取っておくことにした。

1. ロスからメキシコ国境へ

まずはアメリカ・ロサンゼルスへ。ロスの街ではどこに行ってもスペイン語が聞こえてくる。とくにロス南部に行くと住民の9割はメキシコ系だという。米墨戦争でアメリカに奪われた土

地を、メキシコ人は軍隊にも頼らず自力で取り戻しているのだ。

ロスではまず、ダウンタウンにある地下鉄ユニオン・チャーチ駅へ行ってみた。18世紀に初めてメキシコからの移民がこの地に住み着き、そこからロサンゼルスが発展していったといわれる。駅近くにメキシコの土産物やレストランが軒を並べるオリベラ街という小さな通りがある。レストランで流しのバンドがナルココリードと呼ばれる麻薬マフィアをたたえる物語り歌を歌っているのが聞こえてきた。メキシコでは放送禁止になっているのだが、ここは表現の自由の国なのだ。

その脇に、スペイン語でミサを行うカトリック教会があった。教会の表の掲示板には、「家族が国境警備にもかかわらず、泥棒にも遭わず、無事に来れますように」などと書いた請願文が張っている。そのわきに、小さな髪の毛束だけがなく、真っ黒な立派な三つ編みがざっくり切られて留められているのはギョッとさせられた。髪の毛など身体の一部を神様に奉納するのはメキシコの習慣のようだが、私が目にしたのはここが初めてだった。教会には在留許可に関する相談窓口などもあり、こ

こはメキシコ人、それも不法に渡ってきた人たちが集う場らしい。

翌日、グレイハウンドに乗って、メキシコ国境の街サンイシドロを目指す。バスの乗客はほとんどがメキシコ系だ。ロスからわずか3時間弱で終点に着いた。人の波に続いて、スーツケースをよっから引張って、長い陸橋を歩いて渡る。動物園にあるような鉄棒の回転扉を入ったところで、入管らしい窓口で4〜5人の男性が並んでいた。アメリカからメキシコに入国する場合、72時間以内にアメリカに戻るならパスポートも入国手続きも必要ない。しかし私は1週間は滞在する予定だったので、入国手続きが必要だ。列の後ろに並んだところ、前にいた腕に入れ墨をびっしり入れた若い男性が振り向き、流ちょうな英語で、「あんたはここじゃないよ、おれたちはパスポートがないからここに並んでいるんだ、強制送還されたんだ」と教えてくれた。

別の建物に行つて入国税26ドルを支払い、ハンコを押してもらえば手続きは終わり。スーツケースを開ける必要もない。たとえ違法な薬物や銃を隠し持っているても平気なわけだ。もうひとつの回転扉をくぐれば、そこはテイ

フアナである。高層ビルも建ち並ぶが、入管の前に広がるのは埃っぽいメキシコの田舎町の風景だった。この街がほかと違う点は、市内バスでドルを出しても、メキシコペソできちんとおつりを出してくれるところか。中心街を歩くと、客引きが片言の日本語でうるさいほど声をかけ、なかには「ハッパ？」と小声で呼びかけるものもいた。

投宿した安ホテルの従業員らによると、もともとはティファナの観光産業はサンディエゴのアメリカの海兵隊が週末に遊びに来るので持っていたという。しかし海兵隊に禁足令が出て以来、ホテルやバーはすっかりさびれてしまった。治安の悪化もひどいが、仕方がないとあきらめているという。

治安に関しては、私が乗ったタクシ―運転手も、「3か月前に強盗に遭った」と教えてくれた。さいわい無事に逃げられたが、同僚の中には怪我をさせられた者もいる。しかし強盗に遭っても「警察には行かない」という。通報しても来てくれないし、捜査もしないのて時間の無駄である。「自分の身は自分で守るしかない」というが、夜中にひとりで走るタクシ―で、どうやって自分の身を守るのだろうか？

それでもティファナ郊外を少し回ると、マツチ箱のような新興住宅地がちこちに広がり、空港近くにはマキラドーラ(輸出加工工場)が建ち並んでいる。この新興住宅地、住んでいるのはほとんどがアメリカ人なのだという。大部分はメキシコ系だが、スペイン語を話さない「アメリカ人」もいるとか。アメリカ側に住むよりも家も物価も安いので、こちら側に住んで毎日車でアメリカ側の職場に通うのである。子どもたちも向こう側の学校に行くので、毎日親が車で送り迎えしなくてはならない。サンディエゴの会社に9時に着くには、明け方に家を出て、入管の長い列に1時間、ときには3時間も並ぶ必要がある。しかしこれが国境を挟んだ「ツインシテイ」(双子都市)というものなのだ。

2. 「ナルコの神様」と対面

ティファナから飛行機でシナロア州の州都クリアカンへ。空港から市街地まで、タクシ―の窓から見えるの是一片のトウモロコシや大麦などの畑が広がる、豊かな農業地帯の風景だ。しかしこの街は、数々の大物マフィアを輩出し、市街地での銃撃戦もしばしば報

道され、実際のところ、戦戦恐恐だった。しかしクリアカンの中心街に着いてみると、コロナアル調の建物や教会が並び、清潔で落ち着いた街並みに少しほっとした。

ここを訪れた目的は、「ナルコの神様」として知られるヘスス・マルベルデの礼拝堂を訪れること。ペレス・レベルの『ジブラルタルの女王』やドン・ウインズロウの『犬の力』といったメキシコの麻薬マフィアを扱った小説にも登場し、どんなところかと想像していたのだ。

市役所の観光課を訪ね、おずおずと「ヘスス・マルベルデについて資料はないか」とたずねてみた。すると奥から女性職員が出てきて、観光ガイドもやっているから、とマルベルデ伝説をとうとうとガイド口調で話してくれた。

——マルベルデはメキシコ革命のころの義賊だった。金持ちから金品を盗み、貧しい人々に分け与えていた。そのため知事に恨まれ、懸賞金がかけられた。マルベルデは親友に裏切られて殺され、知事は死体を木に吊るし、埋葬することを禁じた。そこに家畜が行

方不明になって困っていた貧しい農民が来て、マルベルデの遺骸に祈ったところ、家畜が出てきた。奇跡だと喜んだ農民は遺骸の下に小石を積み上げ、周囲の人々にも頼んで石を積み上げていつて、ついには遺骸を埋めてしまった…。

マルベルデ伝説にはいくつかのバージョンがあり、実在した人物かどうかも確かではない。役所ではマルベルデについての資料はとくにおいていないが、礼拝堂に行けば解説した冊子を買っているという。もともとは庶民の信仰を集める聖人で、地元の「とげぬき地蔵」のような存在だったのだ。のちにこの地域で麻薬栽培や密輸に携わる人々が増えると、そのような人々が訪れるようになり、「ナルコの神様」と呼ばれるようになったわけである。マルベルデの礼拝堂はとくに観光スポットというわけではないが、観光バスで前を通りかかったときには市の職員であるガイドさんはそもそもそのいわれを語っているのだという。

観光課で教えられた通りにバスに乗ると10分ほどですぐに着いた。マクドナルドもすぐ近くにある大通りに面した場所で、緑色に塗られた壁とスレ

ート屋根の、いかにも建て増しを繰り返していった風な建物で、屋根には十字架が掲げられている。もちろん、マルベルデはカトリックの聖人とは認められていないのだが。

礼拝堂の前には土産物の屋台が5、6軒並び、お堂の中には生花や造花、祈願文を書いた紙切れや写真にびっしり囲まれて、マルベルデの胸像があった。お参りをする人は、胸像の頭をなで、さい銭箱にいくら入れ、近くで待機している楽師にいくら払って歌を何曲か奉納することもある。メキシコの聖人だけに、陽気な音楽が好みなのだ。マルベルデをうたった歌もいくつかあり、土産物屋でCDが売られている。

平日の昼間、昼食をはさんで3時間ほど、礼拝堂の管理人とおしゃべりしながら観察した。礼拝堂には平日にもかかわらず、タクシーや家用車で家族連れなどが次々に訪れ、人出は絶えることがない。マッチョな見かけでその関係の人か？と思わせる男性も来れば、いかにも貧しげな、病氣らしい子どもを連れた女性も来る。参詣に来る人の数は平日も週末も変わらないという。

管理人はフランシスコという名前で、5年前からこの仕事を始め、夜中も交代で寝泊まりして礼拝堂の世話をしている。この仕事を始めたころ、けがした足が腐りかけていたが、每晚薬草をつけてここで寝泊まりしているうちにきれいに治った、奇跡だった、と話してくれた。夜にはお堂を閉めて鍵をかけるのだが、夜中や明け方に来て扉を開けさせ、セレナーデを奉納していく客もあるという。それでもここで撃ち合いになったことなどはなく、危険を感じたことはないそうだ。

地元のタクシー運転手にマルベルデのことをたずねてみると、「昔はよく行っていたよ。その必要があるときに〔笑〕。しかしあることがあって、もう行かなくなった、という。何があったかは教えてくれなかったが、マルベルデは霊験があったともなかったとも言えない、という返事だった。今ではその道から足を洗って、地道に運転手として働き、普通の教会に通っているということだった。ほかに地元で話した人たちも、自分はナルコとは関係ないが、家族の病気とか受験とか、なにか願いたいときに行くことがある」と話してくれた。

3. 大溪谷を行くチワワ鉄道

クリアカンから北にバスで約3時間の太平洋岸の商業の街・ロスモチスからチワワ鉄道に乗る。アメリカのグラント・キャニオンにも勝るといわれる険しい溪谷を縫うように走ることで知られる列車である。19世紀末から建設が開始され、1961年にやっと全線開通した。急行の「等車」と各駅停車の2等車が1日各1便走る。1等は大部分が観光客が利用し、2等は地元の人々、とくにチワワの山岳地域に暮らすタラウマラ民族の生活の足となっている。タラウマラは正しくはララムリといい、長距離走に秀でていることで有名だ。女性たちは色鮮やかな花柄のギャザースカートに同じ柄のシヨールという美しいスタイルが目を引き。

早朝にロスモチスの駅を出発したチワワ鉄道は、しばらく平原を走り、昼前ごろから山岳地に差し掛かる。噂にたがわぬ絶景で、ガタガタ揺れる列車のデッキから皆、体を乗り出して写真を撮っている。停車駅で停まるのは2、3分だが、その間にタラウマラの女性や子どもたちが、リングや手編みのかごを売りに列車に駆け寄ってくる。2

キロはありそうな大きな袋入りのリングも手の込んだ小かごも20ペソ。日本円にすると120円くらいと、申し訳なくなるほどの金額だ。子どもたちは鼻水を垂らし、靴もはかず、いかにも貧しげである。

列車で隣り合ったメキシコ人の男性はチワワ市に住み、仕事の関係でチワワ鉄道をよく利用しているというので、地元の様子などを教えてもらった。仕事は「運送業」だといい、休暇でこれから国境近くの街に住む競走馬のオーナーをしている若い友人に会いに行くところだ、と話してくれた。競走馬のオーナーといえば、その手の仕事で大金を稼いだ人が多いと聞く。その友人がなぜお金持ちなのかという問いには、「さあね」と笑って答えてくれなかったが、。国境地域の街では、自分自身が麻薬と関係していなくても、自分の親戚や友人知人のなかに必ずといっていいほど誰かは麻薬取引やあるいは使用者がいるという。もちろん、金持ちイコール麻薬関係と勝手に決めつけてはいけないが。

しかし実際、シナロアからチワワにかけてのこの地域は麻薬の栽培地帯で、列車の窓から見えている山の向こう側

には、あちこちにマリワナやケシの畑があるという。一度、列車の窓から見えるところにマリワナを栽培していたうっかりものが出て、すぐに発見されて捕まったそう。

ちなみに、帰りの列車で同席になった男性は、チワワ鉄道の沿線に近い鉱山で技師として働いているといった。仕事は交代制できつく、危険も多いが、給料は悪くないそう。この東マドレ山脈一帯には金、銀、銅など地下資源が豊富で、外国企業による開発も進んでいる。国家にとつては重要な外貨獲得の手段だが、鉱山開発とナルコによる麻薬栽培が、この地の先住民たちの土地を奪い、暮らしを破壊していつている。

(やまもと あきよ… 非常勤講師。著書『メキシコ・ワステカ先住民農村のジエンダーと社会変化』(明石書店)。メキシコ麻薬密輸カルテル関係の情報を集めたウェブページ <http://www.aqui.yo.jp/> も随時更新中)

リオス・モント將軍に対する

ジェノサイド裁判

石川智子

エフライン・リオス・モント將軍が、内戦中のジェノサイド及び人道に対する罪により裁判にかけられることが、去る一月二十六日に決まった。多くの内戦犠牲者が三〇年以上もの間待ち望んでいた、歴史的な出来事である。国家軍による人権侵害について最高指揮官の責任を追及する道が開かれたとして、期待が高まっている。

リオス・モントは今年八六歳。グアテマラで最も残酷な軍事政権を率いた大統領として名高い。一九八二年三月に大統領（同時に国家軍最高司令官）を務めた。この間の軍部による殺人、暴行、拷問などを命じた。あるいは許容した責任を問われていた。検察によれば、少なくとも二六六の軍事行動により、百人以上の虐殺、一七七一人の殺害、一四八五人の性的暴行が行われ、約二万九千人が弾圧から逃れるために居住地を追われた。

一九九六年の和平合意後、各地の被害者のグループが集まり、現地NGO「人権のための法的アクションセンター」(C.A.D.H.)の支援を得て、人権侵害の責任を法的に追及するための「正義と和解のための協会」(AJR)を形成、二〇〇〇年にリオス・モントをジェノサイドの罪で告訴し、裁判を求めた。権力を保

持する彼を国内で裁くことなど不可能という空気も漂う中、証言集めや秘密墓地発掘、意識化などを地道に続けてきた。



また当時の軍部の文書が明るみに出始め、様々な軍事作戦や命令系統なども明らかになり始め、有力な証拠となることが期待されている。数年前からは虐殺や強制失踪などいくつかの重要な事件で当時の政府高官や軍人が裁判にかけられていたが、その命令系統の頂点にあった国家元首に対する裁判は初めてのことである。

リオス・モントの前任者ロメオ・ルカス・ガルシア及び後任者ウンベルト・メヒア・ビクトレス（いずれも軍事政権）に対しては裁判が求められていたが、前者は二〇〇六年にベネズエラで死亡、後者は脳障害のため今年一月に意思能力不十分と認定され、裁判に至っていない。

リオス・モントはこれまで国会議員特権により裁判を回避してきたが、去る一月四日にこの特権を失い、二七日法廷に出頭した。弁護側は、彼が紛争地帯で直接指揮を執っていないことなどを論拠として無罪を主張したが、命令系統における責任から起訴が成立した。高齢であることなどから拘留は免れ、六万四千

ドルの保釈金を払って自宅で軟禁されている。検察は二ヶ月以内に調査結果を裁判所に提出することとなっている。

国内では、軍部に対する裁判を断固として拒絶するグループは多い。元軍人の現大統領オットー・ペレスを筆頭に「グアテマラでは国内武力紛争はあったが、ジェノサイドはなかった」と主張している。今後のジェノサイド裁判の行方は全く予断を許さない。

第29回庭野平和賞 口サリーナ・トゥユクさんに



庭野平和財団が作っている庭野平和賞の今年度受賞者に口サリーナ・トゥユクさんが選ばれた。先住民の宗教実践（マヤ）の実践者による受賞は今回が初めてのことです。受賞理由は「口サリーナ氏は、数十年にわたって未曾有の暴力と内戦にさらされたグアテマラに住み活動を続けています。グアテマラの先住民たちは、社会の中心から組織的に排除され、彼らの伝統的宗教の知恵は無視されてきた。女性は性的暴力や経済的搾取などさまざまな形の暴力、人種主義や様々な差別の被害者である。しかし同時に、それらは彼女たちと立ち直りの源泉でもある。口サリーナ氏は公正で差別のない未来と、平和を基盤とする新たな文化の構築に向けて道を示している。」

コカ

Kuka

コカ、緑の植物
インカたちの植物
すべてを知っている
すべてを語る

危険を防ぎ
飢えを消し
痛みを和らげる
美しい緑の植物

先祖たちの植物
貴重な美しい葉を
よそ者たちは
毒に変えてしまった

白い粉のように
化学物質と混合して
金もうけのために
人間を狂わした

北からやってきて
毒を撒いて
美しい植物を
枯らした

今の時代の人間は
すべてを支配できると思い込み
一層の危険に入り込んでいる
その毒を吸って

それだけではない
永遠に
母なる大地を怒らせるかもしれ
ない
その声聞かないために

作者：アリシア・テラン・デ・デ
イク
詩集アイランプより
訳：栗原重太



音楽三昧♪ペルーな日々 (第45回) 在りし日のアンデス音楽を求めて

二〇一二年三月十日より、上野の国立科学博物館にて「インカ帝国展」が始まった。意外にもインカ帝国自体をテーマにした特別展は初だそうで、今回公開される殆どが日本初上陸であるという。これから二年かけて全国をめぐるのだそうだ。今回、残念ながら楽器の類はあまり来てはいないが、せっかくのいい機会なので、第一八回「インカ音楽再構成の夢」に続き、今回はペルーの古い時代の音楽について思いつくままつらつらと書き綴ってみたい。

「ラテンアメリカには弦楽器がなかった」というお話はわりとラテン音楽愛好家の間では知られているが、それ以外の情報になると、途端にあやふやになってくる。征服以前の音楽がどのようなものであったのかに関しては、考古学的資料や征服後に製作された「クロニカ(年代記)」などの記述を中心に、時に現代のアンデス住民の音楽なども参考にしながら再構築していくほかはない。長い植民地時代と、独立後の様々な同化政策などにより、アンデス住民の音楽世界は

大きく様変わりしていることは間違いない。それでも、「先住民的」とされる歌唱法や音階、歌の催される場や祭りなどに、征服以前の音楽の残滓を見出だせる。ただ、問題はどうかやってその中からそれが征服以前の音楽的要素であるのかを明らかにするのかということだ。

そもそも、アンデス音楽研究は、「インカ」音楽研究から始まったと言ってもいい。「コンドルは飛んでいく」の作曲家アロミア・ロブレスに代表されるように、一九世紀末より高まった「インカ」風歌劇の流行とそれと相前後するアンデス音楽の収集は、一九二五年にフランス人のダルコー夫妻が著した『インカの音楽とその生き残り』によって一気に研究というレベルに引き上げられた。こうして一九四〇年代までのアンデス音楽研究は、「インカ」音楽の歴史的再構築と、同時代のアンデス音楽における音階の構造についてが興味の中心となつて大いに盛り上がった。こうした研究は、現代のアンデス音楽へと音楽研究の中心がスライドしていった後も、今なお議論され続けているテーマである。

また出土した楽器から分かることは、そうして見つかった古い楽器たちが、現在使われている楽器に比べて決して劣つてはいないということだ。むしろ、今は失われ

た様々な技法や工夫が随所に凝らされていたりする。例えばペルーの代表的なパンパイプの一種、アンタラにおいても、遺跡から陶器製のものが数多く多く出土しており、しかも中には筒の内部に段差をつけてより倍音を強調するような構造になっているものまであったりする。こうした技術は、現在の楽器からは失われたものだ。

また、ケーナに関しては、例えばチンチヤから発掘されたの陶器製のケーナ(写真1)は、ツチノコのように胴体がぶつくりと膨らんでおり、その先端が上に向かってカーブしている愛嬌のある形をしている。音も不思議な響きを伴い、竹のケーナとは全く違う魅力を持つている。また縦笛をより響かせると共鳴胴として利用されたのがマンチャイ・



▲写真1

パイトウと呼ばれる陶器の壺で、この中に笛を入れて吹くことで独特の音色へと音を変換した。こうした楽器の多くは共通の絶対音階を持っていないものが多く、和声を演奏することには向かないものが多かったようだが、中には現在のシク(サン・ポーニャ)と同じような図像が発見されたりと必ずしも合奏されていなかったわけではないこともわかっている。

振り返って考えてみると、音楽が娯楽のためだけに演奏されるようになったのは近代以降の話で、もともと多くの社会では、音楽や歌(詩)とは世界を読み解く一つの手段であり、世界の成り立ちを示したり神とつながる方法であったり、死者とつながる方法でもあったりした。そうした呪術的な側面、そして時に軍や王の威信を示すための側面、歴史を伝える語りの側面、こうしたさまざまな側面における音楽の重要性は、今の我々が考える以上に大きな意味を持つていたといえる。

こうした用途は、今なおアンデスのさまざまな音楽や祭りの中でみつけることができる。例えばさまざまな仮面舞踊が街中を練り歩くことで有名なクスコ近郊のパウカルタンボのママツチャ・カルメン(聖母カルメン)の祭りは、地域の歴史を街中を劇場に変えて演じることによって伝え

ているものであるし、アヤクーチヨやワンカベリカの水のまつりで今やスニーカーを履いて踊られる「ハサミ踊り」は、水の精霊に作物の豊穡を祈願し、また収穫を占うという役割がある。死者をおくるためのハラウイ(無伴奏の女性の歌うアンデスの伝統的な哀歌)は今なお田舎では歌い継がれているし、農作業や牧畜と密接に結びついた祭りや音楽も数多くある。こうした現代に残る音楽のあり方を調べることは、キリスト教が定着する以前の音楽についてもある程度意味があることだと思われる。キリスト教の土着化は、アンデス社会に決定的な変化をもたらしたが、それでもなおアンデスの心性は残り、宗教の習合によるシンクレティズムは、かつての世界観の一端を今にその片鱗を伝えているのではないだろうか。

最後に、インカより時代は下るが、一八世紀後半にペルー北部のトゥルヒーヨに赴任したスペイン司教バルタサル・マルティネス・コンパニヨンの残した通称『トゥルヒーヨ写本』とそこに遺された音楽の復興CDについて紹介して今回は終わりたい。

マルティネス・コンパニヨンの名は、一八世紀後半の民衆の生活、特に水彩画で生き生きと幅広く記録したことで広く知ら

れている。しかし彼はそれだけでなく、地図や動植物の記録、風俗や音楽文化にまで言及しており、特に音楽に関しては当時の音楽の貴重な楽譜を遺している。これは非常に重要な記録で、この時代の民衆音楽がこのように記録に残っている例はほとんどないといつてよい。また当時の楽師たちや踊りの様子も水彩画で遺されているのも重要だ。それだけ貴重な記録であるため、これまでも何度か再現演奏が試みられ、また録音もされている。最近では「エル・コンゴ」というタイトルでアドリアン・ファン・デル・スプール&アントネツロによるCDが二〇〇九年に発売されている(写真2)。これは日本語解説付きで手に入りやすいものなので、ぜひ興味がある人は、再現されたものながら、一八世紀ペルーの音楽風景に耳を傾けて、楽しんで欲しい。

(水口良樹)



▲写真2

ミゲル先生のメキシコ食巡り アラビア風コロッケ

KIBI HORNEADO

今回はとても簡単で安価で栄養たっぷりのユカタン料理です。

1800年代の末、レバノンから多数の移民が訪れ、その多くがユカタン半島に住みつきました。これによって多彩な生活習慣や料理文化がもたらされました。現在メキシコには100万人を超えるレバノン移民の子孫がいると考えられています。

レバノン移民がユカタンにもたらした料理のひとつがKibiです。レバノンではKibbeh、アラビア語ではKubbaと発音され、Kipe, Kibba, Kepi, Kipi, Kiwiと地域によって呼称はさまざまです。

レバノンの国民的料理で、トルコやアルメニア、パレスチナ、シリアでも有名です。Kibbe (キッバ) という、羊のひき肉と小麦粉などを混ぜて焼いた料理はレバノン人が名付けたものです。普通は、香辛料で味付けした子羊のひき肉を使います。

ベネズエラやブラジルではKibe、コロンビアのある地域ではKibbe、ボリビアではCupiやKepiと呼ばれています。メキシコでもKepe や Kipi と呼ぶ地域もあり料理法もさまざまです。

ユカタンでは街のあちこちにKibiの売り子があり、紫タマネギのソースや、酸っぱい柑橘やキャベツ、酢、ハバネロを添えて売っています。郷土料理



の食堂ならどこでも味わえます。バーでビールを頼むと無料でついてくる、スペインのタパスのような小皿にも、ソースつきのKibiフライかオープン焼きが出てきます。紫タマネギと生のハバネロのみじん切り、酢・塩を混ぜたソースを添えることもあります。ユカタン州では社会的地位に関係なく、マヤの先住民族も含め誰もがKibiを楽しんでいます。

私の実家でも、フライにしたりオープンで焼いたりしていました。家族や友人のパーティーの食卓にもしばしば並びました。

小学校内でもKibiを売っており、休み時間にタマネギソースにつけてジュースをと一緒に食べました。中学校の校門には、いつも2、3人のKibi売りがいて、休み時間には先生も買っていました。役所や病院の入口、公園、街頭でもしょっちゅう売り子を見かけます。今でもユカタンに帰る際はKibiを食べるのが楽しみです。

■材料 4人分

- ・牛ひき肉250g
- ・小麦胚芽100g
- ・タマネギ中2個
- ・ソフトパン粉100g
- ・小麦粉大さじ2杯
- ・卵3個
- ・塩
- ・クッキングシート
- ・生か瓶詰めハバネロ (苦手ならなくても可)

■作り方

- 1) フードプロセッサーや包丁でタマネギを細かく刻む。
- 2) ひき肉と、みじん切りにしたタマネギ、小麦胚芽を混ぜ、少しずつ小麦粉を加えて混ぜる。卵を加え、パン粉を少しずつ入れる。塩で味を整えさらに混ぜる。
- 3) 小麦粉少々を大きな平皿全体に広げる。両手をつかって、先ほどの材料を、飛行船型に整える(球形ではない)。次に、くっつかないように皿の上の小麦粉をまぶし、クッキングシートの型に置く。オーブンをセ氏180度まであたため、40分間ほど焼く。

■ソースの材料

- ・紫タマネギ 2個
- ・米酢 タマネギが十分浸る量
- ・塩 お好みで (ペースト状の梅干しでも可)
- ・ハバネロ、コリアンダー (お好みで)

■作り方

- 1) フードプロセッサーでタマネギを細かく刻む
- 2) 刻んだタマネギをガラスなどの器に入れ、浸るまで米酢を加える。塩をふって混ぜ、タマネギが酢と塩となじむまで10分間ほど置く。酸っぱいのが苦手な人は水を加えてもよい。辛いものが嫌でなければ、このソースにハバネロを加えるか、Kibiを盛った皿に添える。
- 3) 3つか4つのkibiを大きめの平皿に置き、タマネギのソースを見栄えよくかける。刻んだコリアンダーで飾ってもよい。最後に、ハバネロを好みで添える。
- 4) ナイフとフォークでも、素手で食べてもよい。

ホンジュラス —— 史上最悪の刑務所火災

コマヤグア刑務所で火災が発生し 350 人以上が焼死した。原因は漏電とも囚人の一人が自殺を凶って放火したとも言われるが確定していない。逃亡を恐れて囚人を閉じ込めたままにしたことも死者の数を増やした。消防士らによると囚人房が施錠され救出できなかった。同刑務所には定員をはるかに超える 850 人が収監され、看守は 6 人のみ。この事件はコマヤグアだけではなく、ホンジュラス中の刑務所が抱える問題を浮き彫りにした。03 年と 04 年だけで数カ所の刑務所で火災があり 180 人が死亡している。設備は悪く、水もわずかで、火事が起きても水すらない状態だ。刑務所の環境改善が指摘されているが、いまだ実現していない。ホンジュラス当局と米州人権裁判所によると、コマヤグア刑務所以外の 24 の刑務所には定員 8280 人の施設に 1 万 3400 人が収容されており、その半数は未決囚である。(BBC.Mundo 16 de febrero de 2012, 17 de febrero de 2012 より)

ペルー —— 子どもの栄養失調

ペルーの農村部の子どもの栄養失調はアフリカ並み、と NGO セーブザチルドレンは報告した。世界では 1 時間に 300 人もの子が亡くなっており、対策をとらなければ今後 15 年間に 4 億 5000 万人の子が栄養失調の被害を被るといふ。栄養失調で身体的・精神的に発達障害の状態にある子は世界で少なくとも 1 億 7000 万人いるとされる。ペルーでは子どもの栄養失調が 24%、70 万人に達している。ペルーは「奇跡」と言われるほどラテンアメリカで最も高い経済成長を達成したが、その発展が国の隅々まで届いていない。全体では子どもの栄養失調は改善しているものの、アンデス先住民族地域では 73%も達するところがある。また食糧価格高騰で、調査対象の半数以上の家族が食費削減を迫られ、農村部や子沢山の家庭にとって深刻な問題となっている。2011 年に就任したウマラ大統領は子どもの栄養失調の根絶を優先課題とし、12 歳以下対象の食料援助プログラムなどを実施した。しかし経済的、人的資源が不十分で、計画を進めるためには現実的なコストを計算する必要がある。(BBC.Mundo/2012/2/15 より)

パラグアイ —— チャコ地方で森林破壊が進む

パラグアイのチャコ地方で 2010 年に 28 万 6 千ヘクタールの森林が失われ、うち 4 万 2 千ヘクタールが放牧地に転用された。環境団体のグイラ・パラグアイが明らかにした。森林破壊が最も深刻なのがボケロン県で、3 ヶ月で 3200 ヘクタール以上消失している。チャコの西部での喪失率は 09 年に比べて 23%増。同地域はパラグアイ領の 6 割を占め、アルゼンチン、ボリビア、ブラジルにまたがるグランチャコ (150 万平方kmの密林地帯) の一部だ。4 ヶ国の中で、パラグアイが森林破壊の割合が最も高く (76%) 次いでアルゼンチン (21%)、ボリビア (2%) と続き、ブラジルの同地域での森林破壊のケースは報告されていない。

パラグアイのチャコは全体で 1400 万平方kmの森林があり、先住民族共同体の伝統的な生活が営まれ、生物多様性の宝庫だが、現行の法律では環境保護や生産、開発のバランスが適切ではない。グイラ・パラグアイは政府がチャコの実態を分析し、森林破壊を食い止め、炭素資源企業を制限しながらその協力を得る工夫、生物的に重要な地域を保護し、破壊されたものを回復するための法的な枠組みの制定を勧告している。(Noticiasaliadas.org/2012/01/25 より)

この冬は寒暖の差が激しかったせいなのか、庭のえさ台に野鳥がやって来ません。この十数年来、毎冬訪れてくれていた数種の鳥たちが全く来ないのです。きけば野鳥は老衰で死ぬということはなく、天寿を全うするまでに事故や寒さや飢えで大概命を落とすのだそうです。去年までやって来ていたあの鳥たちとは違う鳥たちであっても、彼らの身に何かあったに違いないとあきらめていたら、なんと先日、2ヶ月半も遅れてつがいのメジロが戻ってきました。私がここで見ていた鳥たちは、きっと私の知らないところで命をつないで、またここへ来ているんだと思うと、つい愛おしくなってありがとうとつぶやきました。命は本当につながっている。それにまつわる想いもまた、きっとそうでしょう。昨年3月に、絶たれてしまった幾多の命と、そこに抱かれていた沢山の想いもまた、受け継がれていくのだろうと、戻ってきてくれた鳥たちを前に、ふと思った今年の3月でした。(大西)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.135 あるコロンビア難民の死

Vol.131 エクアドル・アマゾン石油開発

Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告

Vol.130 中米に広がるナルコ

Vol.133 グアテマラ総選挙

Vol.129 コロンビア政治経済状況の行方

Vol.132 ボリビア・ガソリン危機

Vol.135 ペルーバグア事件とその後

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・

FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

43万9537円

<グアテマラ基金>

37万3385円

(2012年3月現在)